フィールド風（現場）からの ㊷

宮田守男

コロナ禍だからこそ、「ゆでガエル」になってはいけない

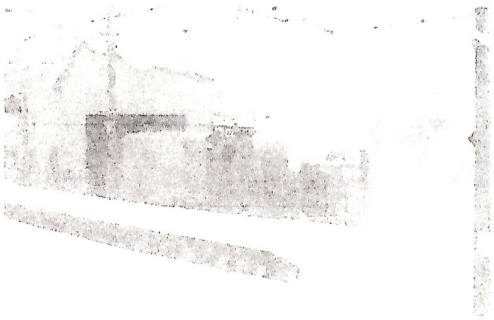
今年もあと7日、まさに年の瀬。「瀬」は川の流れの速い所を意味する言葉。希望を失わず、確実に、来年と言う向こう岸に渡りたいものだ。

北海道新聞のコラム卓上四季さんは、水の中にカエルを入れて水温をじわじわ上げると温度上昇に気付かず、いつの間にかカエルがゆで上がってしまう「ゆでガエル理論」を紹介した。いきなり熱湯にいれると飛び出すが、徐々に熱くすると分からない。気付いた時には、既に手遅れという例えだ。実際は、寓話なのだが、この言葉は、しばしば使われる。この「ゆでガエル」の話は、組織や個人が陥りやすい失敗を的確に表現する言葉だ。人間は、基本的に現状維持を選択し、環境変化も望まない。状況は、刻々変化しても「まだ大丈夫」「もう少しは」と先延ばしにして、対応できなくなるほど問題を悪化してしまうものだ。来年は「ゆでガエル」になってはいけない対策が繰り広げられる年になるよう望むばかりだ。

先週から、一気に雪に包まれた冬景色は、観光関係者には朗報だが特に高齢者世帯や雪落としができない世帯には難問題を突きつけている。地域内に高い屋根の上で作業できる者が、年々激減している。また行政の道路除雪の対象でない住宅も、高齢化により自らが除雪作業できない事例が増えてきている。今後も、住宅建築可能な用地の確保は容易ではないとの情報。これらに対応できる土地利用計画の必要性が論議される事が必要なのだろう。雪と生活する楽しみ方も大切だ。雪かきを苦痛だと考えずに運動療法と思い、長い時間雪かきを費やすほど、血糖状態が改善するとの情報もある。かなりハードな運動なので、心臓への負担や夜明け前からの作業は控え、血圧の高い時間帯を避け、部屋を暖めて食事を取ってから作業すれば、日常の生活も楽しいはずだ。

「読みたいことを、書けばいい」の著者・田中泰延さんは、著書の中で12世紀のフランスの哲学者・ベルナールの言葉「巨人の肩に乗る」を紹介している。歴史の中で人類がやってきたことの積み重ねが、巨人みたいなもの。我々はその肩に乗っての物事を見渡さない限り、進歩は望めない。全ての過去を引用しながらちょっとずつ新しくなるべきだと。前例が当たり前では無く、めまぐるしく変化する現状に、何をすべきかが問われている。

（信州地域社会フォーラム会員・白馬村森上）



ＪＲ東日本の除雪車ＥＮＲ1000ラッセルとロータリーの２役の優れもの。ダイヤ通りの運行に大活躍だ